古墳時代考古学の国際化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2020-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 憲一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21007

明治大学人文科学研究所紀要　第86冊　（2020年３月31日）197-228

古墳時代考古学の国際化

佐々木　憲　一

Archaeology of Kofun Period Japan in the World Context

SASAKI Ken'ichi

The Kofun Period of proto-historic Japan (middle third to early seventh centuries, A.D.) is characterized by the widespread distribution of highly-standardized keyhole-shaped, monumental-scale mound tombs all over Japan except for Hokkaido and Ryukyu. The purposes of this paper are 1) to put the Kofun culture into the world context of mound building cultures and 2) to put the methodology of the Kofun Period archaeology into the broader perspectives of world archaeologies. To achieve the first goal, the author has visited mound sites of the Hopewell and Mississippian cultures of the prehistoric North America and of the Hallstatt and La Tène cultures of Iron Age Germany. To achieve the second goal, the author has presented in English in the United States, Germany and England the results of author's investigations into mound tombs of eastern Japan.

As a result of comparison of the Kofun Period mound tombs with mound tombs in North America and Germany, the Kofun Period mound tombs should be distinguished because these monumental tombs were dedicated to a single chief or very small number of elite family. While mound tombs of a monumental scale were built in Iron Age Germany, they were results of burying a large number of individuals. As more people were buried later, the mound size increased. The same was the case for Hopewell and Mississippian cultures. In North America, in fact, contemporaneous earthworks were more monumental in scale than mound tombs. The author concludes that the Kofun Period culture is relatively unique in the context of world history, and suspects that the custom of dedicating a giant mound tomb to a single individual or a small number of elite family diffused from China where similar customs had existed earlier.

As to the methodology of the Kofun Period archaeology, the methodology is distinguished by the heavy dependence on mortuary records for reconstruction of prehistoric social organization. It is inevitable in Japan because there are little regional and temporal differences in settlement sites during the Kofun Period, with exception of so-called elite mansions. To reconstruct prehistoric social organization based on mortuary records has been sharply criticized by postprocessualist British scholars. In Japan and in Germany, nevertheless, the methodology is valid because there are clear correlations among various aspects of mortuary records, such as mound size and the quality and quantities of goods deposited with the dead. Such correlations do suggest that the differences in the size and in the quality and quantities of goods deposited with the dead must have had some meaning in prehistoric societies.

《特別研究第２種》

古墳時代考古学の国際化

佐々木　憲　一

はじめに

「古墳時代考古学の国際化」という課題は、おおきく二つの側面から成り立っている。ひとつは、日本の古墳を世界史の中に位置づけること、二つめは、日本の古墳時代考古学の方法論を世界の考古学全体の枠組みの中で相対的に位置づけることである。この目的達成のため、筆者は 2017 年度、北アメリカとドイツのマウンド・墳丘墓を見学し、また海外の研究者からコメントをもらうために海外研究機関で自身の研究成果を口頭発表した。

本研究に類する先行研究としては、都出比呂志（2001）の『王陵の考古学』がある。「比較考古学」という立場から、東アジア、エジプト、ヨーロッパの墳丘墓を概観し、巨大な記念碑的墳丘墓を築く意味に迫る、野心的な試みである。都出の高弟である福永伸哉（2015）は都出の研究を引き継ぎ、科研基盤研究 A「21 世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信」（平成 23 ～ 26 年度）を組織し、海外の大型墳丘墓と日本の古墳との比較を試み、世界史の中に日本の古墳文化を位置づけた。本研究も目指すところは都出、福永と大きく異ならない。しかしながら、比較対象と解釈については彼らと大きな違いがある。本研究の対象は、都出、福永が言及しなかった北アメリカのミシシッピ文化や、彼らが少ししか触れなかったヨーロッパの鉄器時代といった国家段階以前のマウンド・墳丘墓である。この違いは、古墳時代を初期国家段階と捉える都出（1991, 1996）、福永（2015）と、古墳時代中後期の奈良盆地・大阪平野・京都盆地については都出の立場を支持するものの、そのほかの地域は古墳時代には初期国家段階に到達していなかったと考える筆者（佐々木 2011a など）との立場の違いの反映である。つまり、日本の古墳時代を考えるうえで、明らかに国家段階以前のミシシッピ文化やヨーロッパの鉄器時代との比較が、都出が考えている以上に有効と考えるからである。

Ⅰ．世界史のなかでの日本の「古墳」

近藤義郎（1983, p. 189）はその名著『前方後円墳の時代』において、前方後円墳は「統一性・画一性をもってあらわれ、各地に普及するという普遍性をもつ」と明言し、その前方後円墳をそれ以前の弥生墳丘墓と区別する特色として、1）鏡の多量副葬指向、2）長大な割竹形木棺、3）墳丘の前方

後円形という定型化とその巨大性、をあげている。まず1）と2）については、複数の埋葬施設を伴うことが多い前方後円墳の場合、後円部の埋葬施設を特に指す属性であって、前方部埋葬施設や墳丘裾の小埋葬施設は後円部埋葬施設に比べて従属的であることから、前方後円墳は後円部に埋葬された被葬者のための特定個人墓と考えられる。

3）については、まず和田晴吾（1981）、北條芳隆（1986）の先駆的な研究により、奈良県箸墓古墳の1/2, 1/3, 1/6の「縮小コピー」の前方後円墳が岡山県や京都府に築かれたことがわかっており、墳丘築造規格が存在した、つまり墳丘が定型化していたことが明らかである。また墳長200mを超える前方後円墳が、日本最大の墳丘長468mの大阪府大仙古墳を筆頭に30基も存在し、これこそが「巨大性」と評価できよう。

本章では、こういった日本の古墳の顕著な特徴が世界でどの程度普遍的なのか、特殊なのかを検討したい。目的達成のため、前述の通り都出（2001）、福永（2015）が取り上げなかった北アメリカのマウンドと、彼らが少ししか言及していないヨーロッパの墳丘墓を取り上げ、都出の比較考古学的研究を補足し、普遍性・特殊性の比較検討を深めたい。

A.　北アメリカのマウンド（図1）

まず、以下のヨーロッパの節では「墳丘墓」という用語を使うのに、北アメリカでは「マウンド」という用語を使うことから説明したい。北アメリカ先史時代のマウンドには、墳丘墓はもちろんのこと、埋葬施設を伴わない儀礼用と思われるマウンドや豪族居館の基壇として使われたマウンドもある。本稿ではそれらすべてを対象とするため、一括してマウンドと記述する。

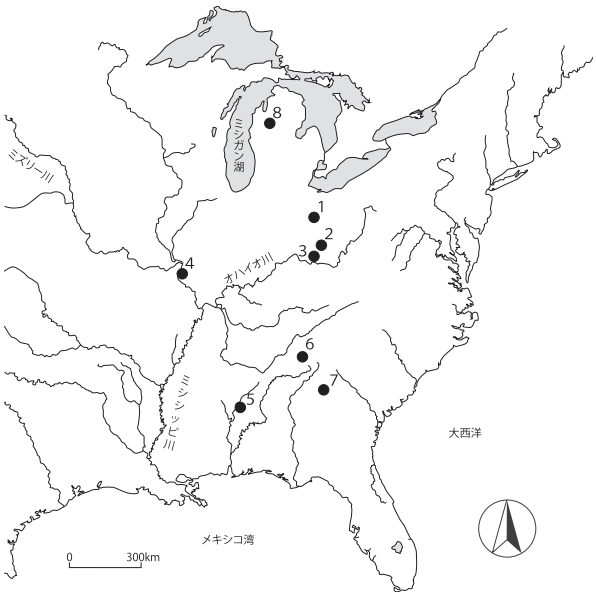

図1　本章で言及する北アメリカの遺跡
(1. ニューアーク、2. サイオト川流域遺跡群、3. サーパント・マウンド、4. カホキア、5. マウンドヴィル、6. エトワ、7. オクムルギー、8. ミソーキー)

北アメリカ大陸では、先住民たちがマウンドの築造に時間と労力を傾注した文化・時代がロッキー山脈以東に存在した。それは、北アメリカ大陸東部ウッドランド中期（紀元前2世紀～紀元5世紀）に五大湖の南部地方、現在のオハイオ州、イリノイ州とその周辺で栄えたホプウェルHopewell文化（紀元前1世紀～紀元3世紀）と、五大湖地方以南のミシシッピ川両岸とそれ以東、大西洋岸に至る広大な地域で紀元10世紀から16世紀ころまで栄えたミシシッピ

Mississippi 文化である。

ホプウェル文化、ミシシッピ文化ともにトウモロコシ栽培を主体とした定住した農耕社会を基盤としていた。しかし、時代的に新しいミシシッピ文化では、社会の階層差がみられる。ホプウェル文化でも社会の若干の階層差は存在したようであるが、葬送儀礼の見地から、それは考古資料としては明確には表れていないようである。

とはいえ、マウンドは地表から突出している遺跡であるため、長い研究の歴史がある。1840 年代にはすでに、マウンドの正確な調査と記述が実践されている。この時期、アマチュア考古学者の E. G. スクアイヤー Ephraim George Squier（1821-1888）と E. H. デイヴィス Edwin Hamilton Davis（1811-1888）がホプウェル文化・ミシシッピ文化のマウンドとを調査し（分布調査と発掘調査）、その成果を 1848 年にアメリカ合衆国　国立スミソニアン研究所から *Ancient Monuments of the Mississippi Valley*『ミシシッピ河谷の古代記念物』として刊行した。遺跡の測量図、マウンドの実測図は極めて正確で、現在でも通用するレヴェルである。

1.　ホプウェル文化

ホプウェル文化は、北アメリカ先史時代ウッドランド時代中期の一地域文化である。そのほかのアメリカ合衆国中西部・東部のウッドランド中期の文化からホプウェル文化が区別されるのは、この文化の先住民たちが墳丘墓の築造に狂奔したからであり、また大西洋沿岸からメキシコ湾岸にかけての広大な諸地域と交易活動を行っていたからである。このホプウェル文化が最も繁栄した地域がオハイオ州南部、オハイオ川に注ぐサイオト Scioto 川流域（図 1 の 2）で、その名祖遺跡であるホプウェル遺跡などのマウンド群遺跡が密集している（Fagan 2005, pp. 434-435）。

ホプウェル文化のマウンドは一般に平面プランが円形か楕円形で、稀に長軸長 50 メートルを超えるものも存在するが、大多数のマウンドは高さ 2 ～ 3 メートルの小規模なものである。また埋葬はマウンド築造開始以前に、地表下に行われる。大きなマウンドには数十から 100 人以上の遺体が埋葬されたが、一度ではなく、長い期間を経て、マウンドを「増築」しながら、追加の埋葬が行われたことがわかっている（Milner 2004）。つまり、マウンドの規模は、共同体の労働力を動員した所産では必ずしもない。さらにマウンドに埋葬されたのが特定の性別や年齢層に限られることはないので（Milner 2004）、社会の階層差を想定することは簡単ではない。

オハイオ州では、考古学者や特に盗掘者によって数百のマウンドが発掘され、1150 体以上の人骨が検出されている。これらの遺体は様々な方法で埋葬されていた。検出状況が分かる例のうち 3/4 以上が火葬である。残りはマウンド築造直前の地表下に土葬され、土葬された人々はエリートと考えられている。遺体は crypt と呼ばれる棺か charnel house（直訳すると納骨堂）と呼ばれる木室に埋葬された。

本稿では、マウンド遺跡の一例としてマウンド・シティ遺跡を取り上げる（図 1 の 2、図 2）。マウンド・シティ遺跡はホプウェル文化が最も栄えたサイオト川流域の西岸地域に位置する。遺跡は 5.3

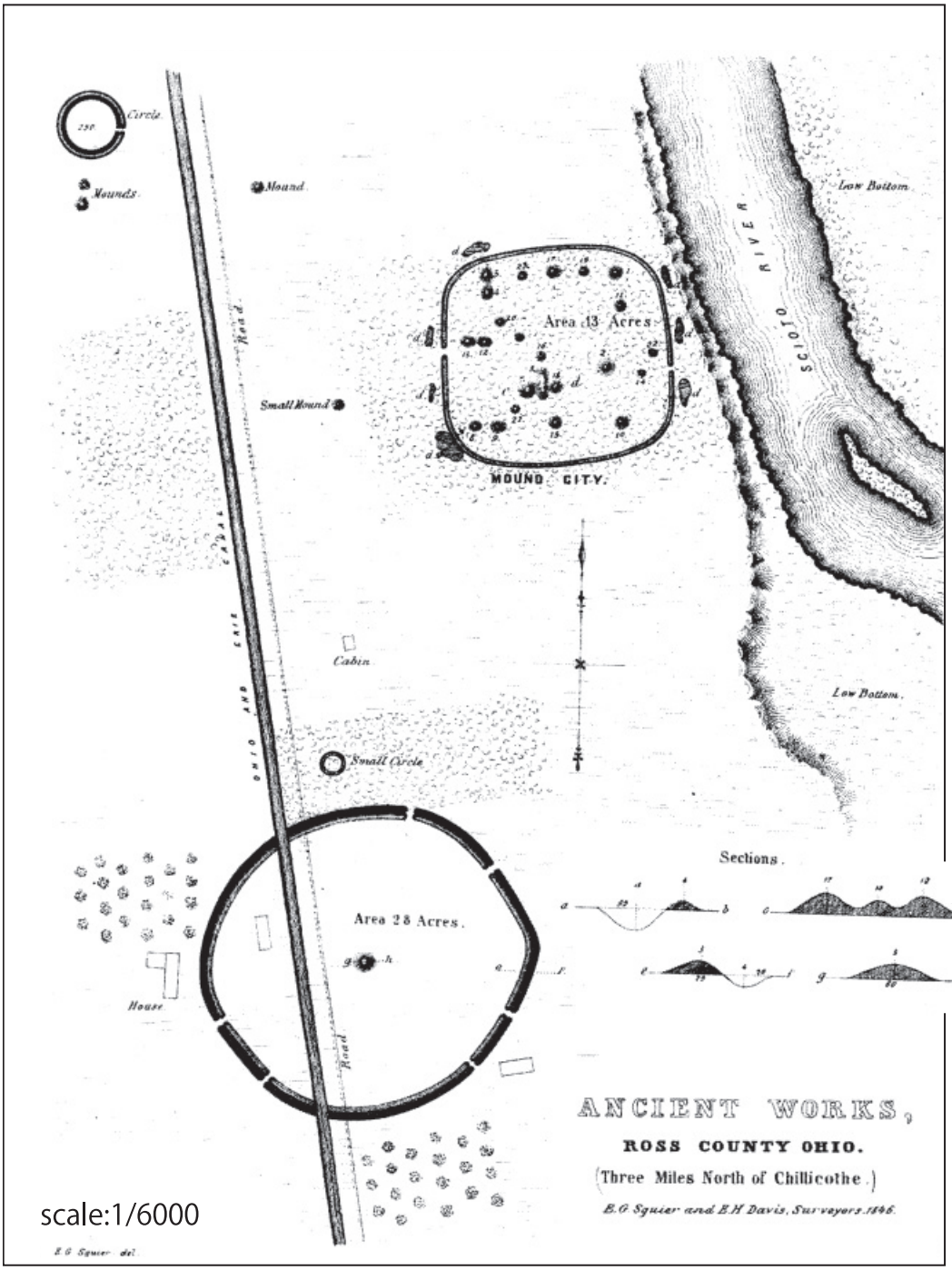

図 2　マウンド・シティ遺跡（図の右上）（Squier and Davies 1848）

ヘクタールの平面プランほぼ正方形で、高さ1メートル弱の土塁によって囲まれている。その遺跡の東面と西面は土塁が途切れている箇所があって、「入口」と考えられている。その土塁に囲まれている区画内にはすくなくとも23基、その外に2基のマウンドが存在する。楕円形の1基を除き、マウンドは円錐形である（Squier and Davis 1848）。

この遺跡もスクアイヤーとデイヴィスによって調査され、その成果が前述の *Ancient Monuments of the Mississippi Valley* に公表されている。この遺跡は第一次世界大戦中の基地建設のために一部破壊されたが、スクアイヤーとデイヴィスの報告書のお陰で、破壊されたマウンドも正確に復元された。

マウンド・シティ最大のマウンドはマウンド7である（図3）。直径27.4mの「円墳」で、スクアイヤーとデイヴィスによると高さ5.3mあったという。彼らは一辺2.7mの正方形のトレンチを墳頂から真下に発掘しており、その結果、このマウンドが単なる土盛り墳ではないことが明らかとなっている。表土直下の層は厚さ60cmの砂利、その下層、墳頂から深さ2.1mのところまでは粘土層、そして薄い砂層と粘土層が交互に4枚存在した。また墳頂から深さ90cmのところで銅製の斧2本が発見された。また墳丘構築面よりも45cm地下には粘土が敷き詰められた面が発見され、その縁にはほぼ円形の雲母片が弧を成すように敷き詰められていた（Squier and Davis 1848）。

図3　マウンド7（筆者撮影）

そのほか1963年の発掘調査の結果、マウンド築造予定地に様々な葬送儀礼に使われた木製の建造物が建っていたことが判明している（図4）。建造物の中では、いくつかくぼみが設けられ、火葬が行われた。そのほか、一度腐敗しばらばらになった遺骸が再葬されたり、あるいは完全な遺体が埋葬されたりしたケースもある。また、必ずしも副葬品というわけではないのだが、マウンドからは自然銅を叩いて成形した道具や装飾品、黒曜石製品、雲母の板などが発見される（Brown 1979）。

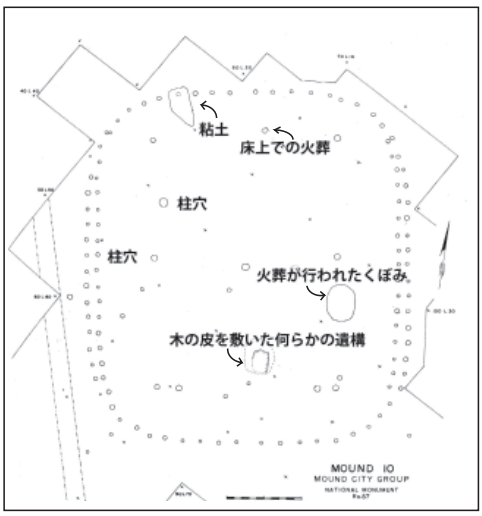

図4　マウンド・シティ遺跡マウント10築造前の葬送儀礼用建物遺構
（Brown 1979, Fig. 27.1 一部改変）

2. ミシシッピ文化

ミシシッピ文化は地理的に非常に広範囲で栄えたが、その中でも最大の遺跡がイリノイ州南部のカホキア遺跡、第2位の規模を誇るのがアラバマ

州マウンドヴィル遺跡である。これらはロッキー山脈以東で最大、第2位の遺跡でもある。ホプウェル文化のマウンドと変わらない小規模なマウンドも多数存在するが、カホキア遺跡やマウンドヴィル遺跡のマウンドには大規模なものもみられる。これらの遺跡については、別稿（佐々木 2014）で詳述したが、本稿ではこれら2遺跡に関する近年の知見を紹介したい。

カホキア遺跡は、ミシシッピ川に注ぐイリノイ川河岸の南北40km、東西17.7kmの盆地に立地する。最盛期のA.D. 1050 ～ 1250の期間、その規模は10㎢に達し、そのうち、800haが居住域であった。規模、形状、機能の異なるおよそ120のマウンドが2世紀くらいの期間に築造された（図5）。多数のマウンド築造のために、土取り穴が多数掘られた。その大多数は遺跡の南半分に集中している。土取り穴は、雨の多い季節には現在でも雨水で満たされるほか、埋め戻された土取り穴も幾つか発掘調査で検出されている。遺跡最大のマンクス・マウンドの前にはプラザ plaza と呼ばれる広場が広がっている。その広場も含めた遺跡の中央部の80.9haは木製防御壁によって囲まれていた。また、中央部以外にも、マンクス・マウンドの両側と背後に小さめの広場（プラザ）が3か所広がっていた（Iseminger 2010）。

マンクス・マウンド（図6）は最大高さ30.4m、底面での規模316 x 240m、6.4ha、盛土の土量614,478㎥で、南北両アメリカ大陸で最大の土製建造物である。カホキア遺跡のほかのマウンドの2倍以上の規模を誇る。マウンドのボーリング調査の結果、ほかのマウンドと同様、A.D. 1000以前から3世紀の間、数段階に分かれて築造されたと言われてきた。しかし、近年の考古地磁気法による年代測定では、1100年から1130年の間、20年くらいの期間でマウンドの大部分が一気に築造された可能性が指摘されている。ただ、最終段階のマウンドの頂上部の完成は1300年頃という（Schilling 2013）。その最終段階には、平面プラン30 x 12mの大きな建造物が築造され、その建造物の前には柱が1本立っていた。ただ、発掘調査を十分できないため、マウンドの機能は不明である[1]。もし、シリング（Schilling 2013）の年代測定結果を信用すると、カホキアの社会では共同体の労働力を大々的に一気に投下できたこと、そういった「組織力」があったことを意味する。マウンドの機能は不明とはいえ、以下のマウンド72の成果を考えると、マンクス・マウンドは特定個人墓とは考えにくく、共同体の労働力は共同体全体のために投下された点では、その意味は変わらないと思う。

マウンド72（図7）は、カホキア遺跡最小であるため全面発掘が可能であることと、マンクス・マウンドを通る遺跡の主軸線上にほぼ立地するという理由で、全面発掘された。長軸42.7m、短軸21.9m、現状高さ1.8m（3mと推定）の規模を有し、もともと3基の小マウンドを一つにまとめて盛り直したことが判明した。このマウンドはミシシッピ文化では珍しく、個人のために築かれた。具体的には、マウンドの東端付近に埋葬された40歳代前半男性のための墓と推定されている。遺体は2万個以上のメキシコ湾産の貝製ビーズの上に横たえられていた。つまり、共同体のリーダーの墓ではないかと推測されるのである。その直下にはもう一人の男性が埋葬されていた。またそのリーダーの周辺には6人の人びとが埋葬されていた（Fowler 他 1999）。

近年、エマーソンら（Emerson 他 2016）がその2体とその他の人骨を生物考古学的に再分析したところ、まず上下に重なって埋葬された男性2体は男女のペア、さらに当初報告の6体ではなく12

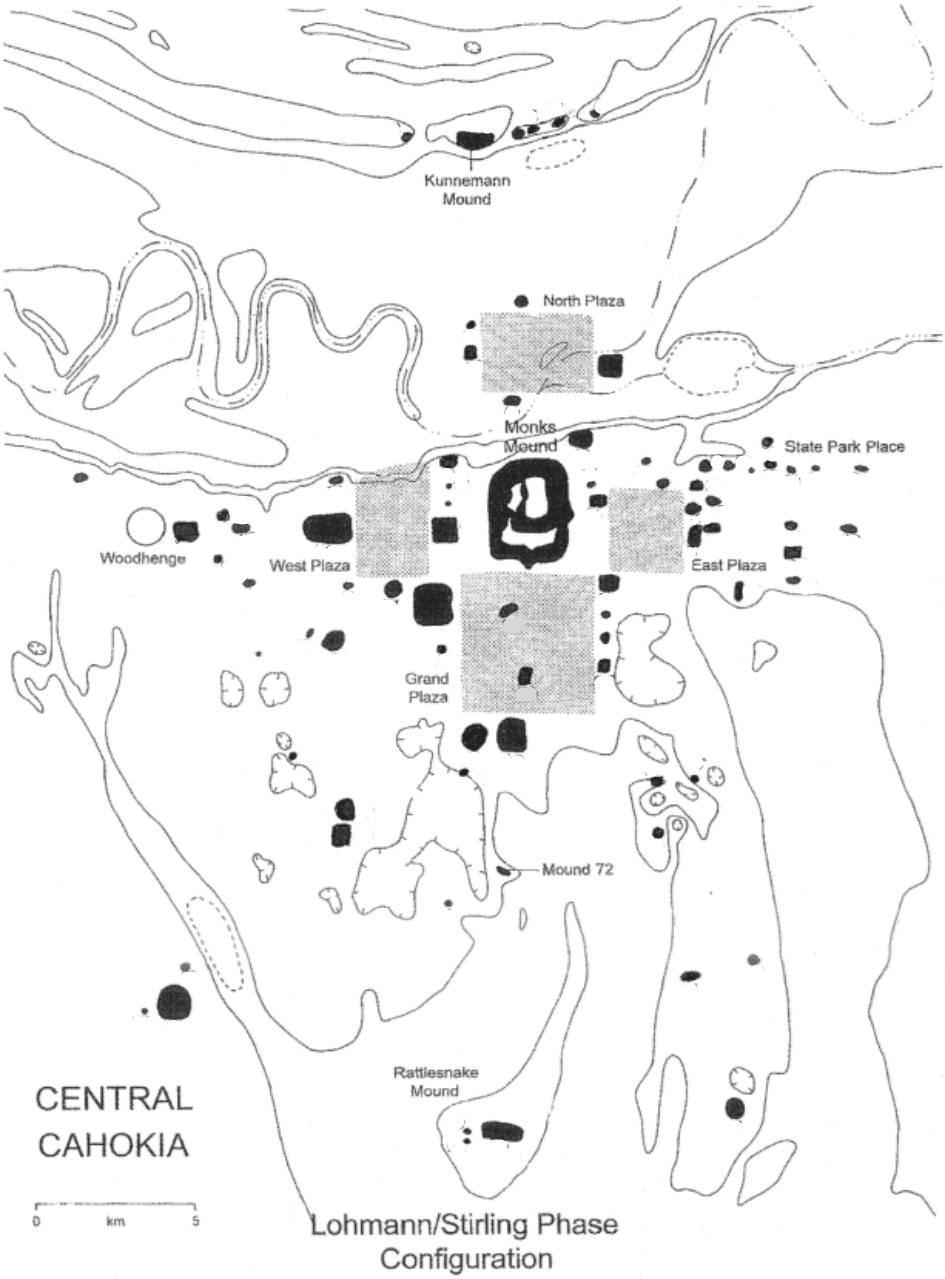

図 5　カホキア遺跡 (Iseminger 2010, p. 97)

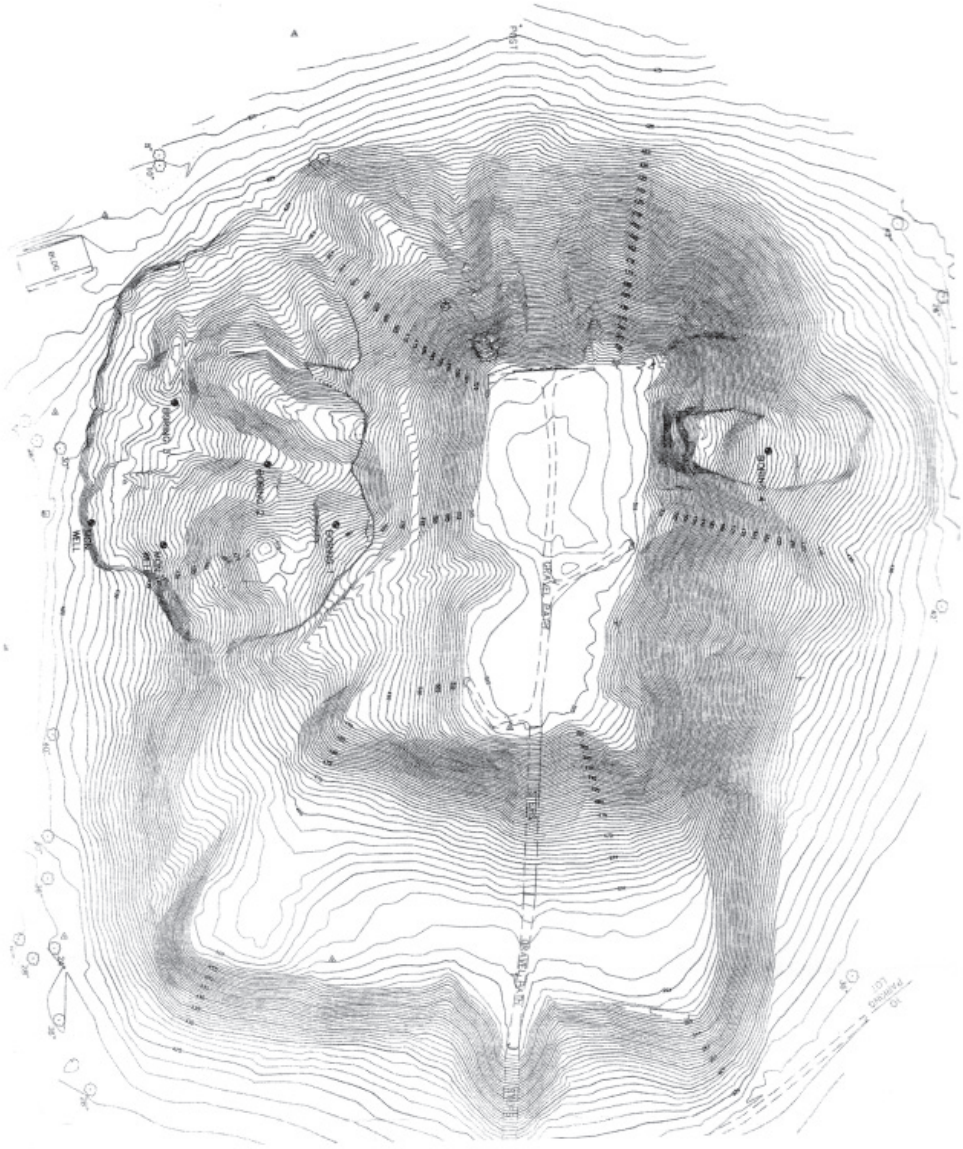

図 6　30.5cm コンターのマンクス・マウンド（縮尺不明）（Iseminger 2010, p. 43）

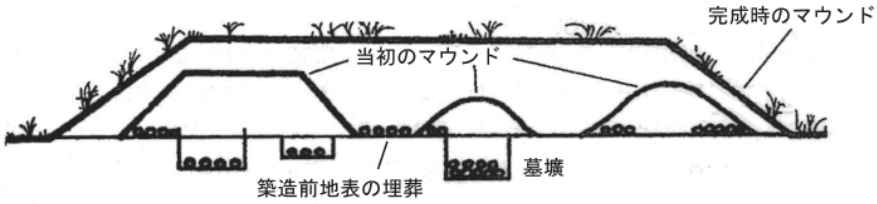

図７　マウンド 72 の断面模式図

体の遺体、その内多数は女性、そして最低一人の子どもを同定した。先行研究では、これらの遺体と埋葬行為は、「2 体の男性」が特権階級であった証拠と見做されていた。それに対して、男女のペアと多数の女性の存在は、大平原地域の複数の先住民族、特にカドー Caddo 族が広く信じる天地創造神話との共通性をエマーソンらは見出し、もとの小マウンド 1 の埋葬は「天地創造と再生、多産の象徴性を促進する」ものと主張した。

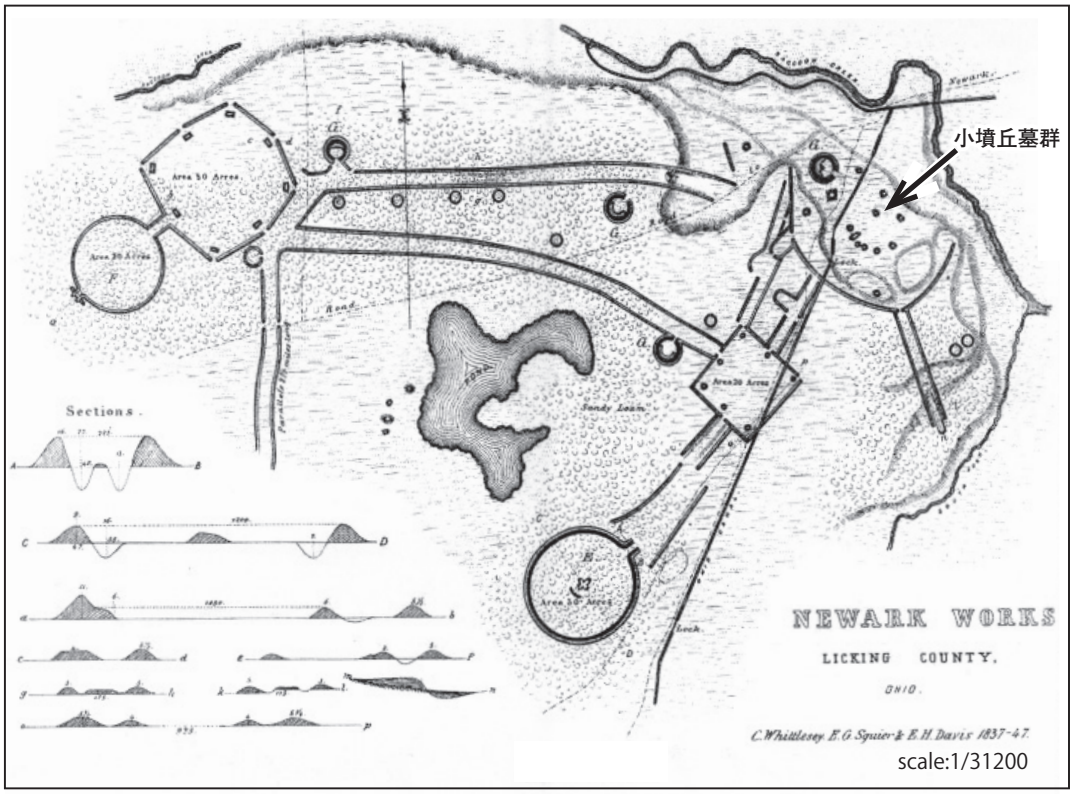

図８　ニューアーク土塁遺跡群 (Squier and Davies 1848)

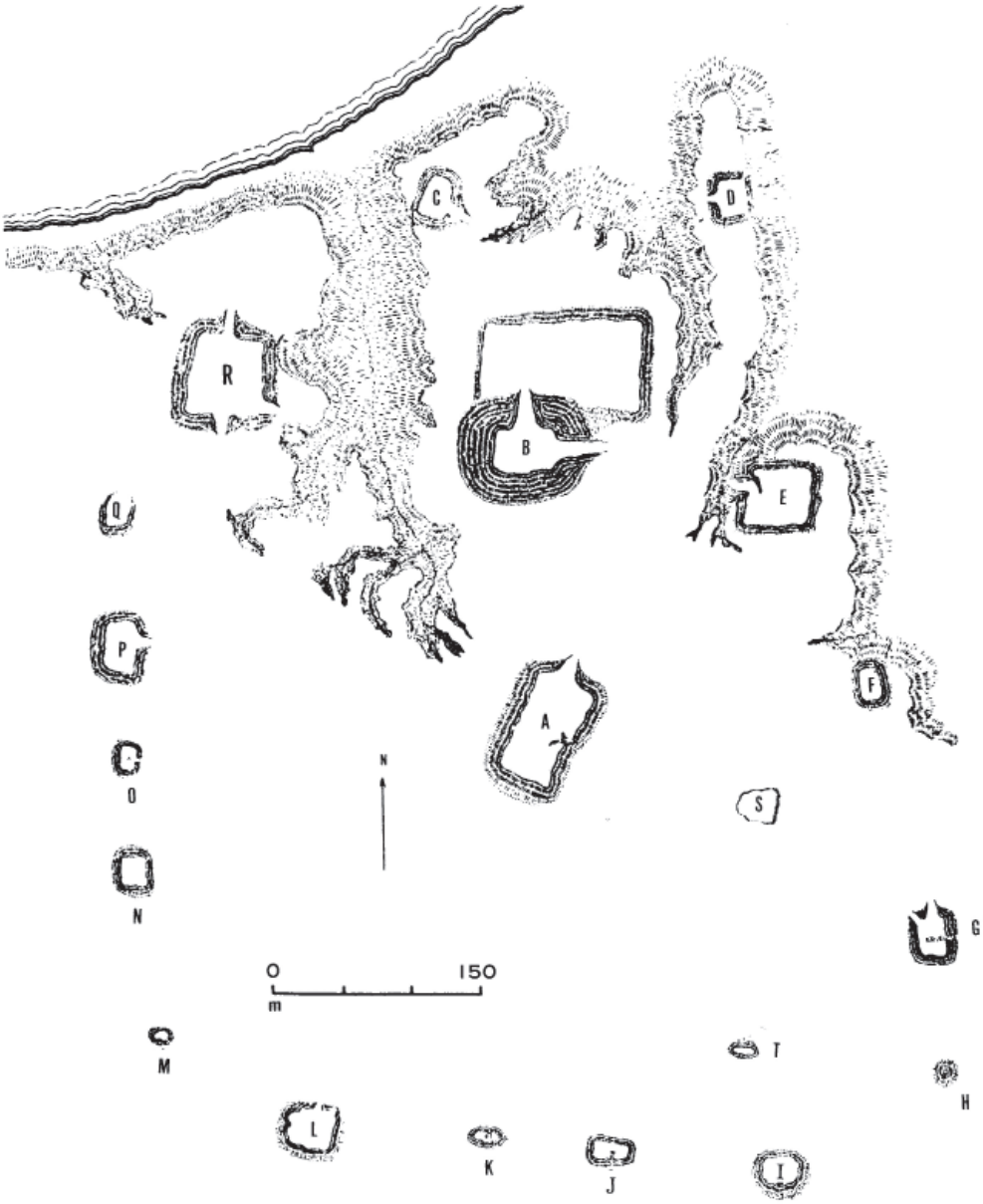

図 9　マウンドヴィル遺跡 (Moore 1907)

そのほか、殉死とも考えられるエリートらしい男女各3名（計6名）がリーダーの南西部に埋葬され、北アメリカ各地からもたらされた様々な副葬品が大量に殉死者の上に置かれた。15歳から25歳と推定される女性が複数の墓壙にわけて53体、24体、22体、19体埋葬され、生贄と思われる。もとの小マウンド築造時の地表面には、頭と手足が切断され、腕を組んだ状態の20歳から45歳と推定される4人の男性遺体が置かれたと報告されている（Fowler 他 1999）。

マウンド72が特定個人あるいは選ばれた2名のための墓とすると、それがカホキア遺跡で最小であるという事実は重要である。というのは、共同体の労働力を特定個人のために投下することに大きな意味をもっていなかったということである。このことは、後述する「公共工事」的な意味を有するウッドランド後期の大型「土塁」[2]と隣接する小墳丘墓、あるいはホプウェル文化最大の遺跡であるニューアーク「土塁」群に隣接する小墳丘墓群（図8、佐々木 2019）の関係をみると、蓋然性が高い。これは日本の古墳と大きく異なる点と言えよう。

次に、マウンドヴィル遺跡（図9）は北アメリカ大陸南部の現在のアラバマ州で1250年頃から1500年ころまで栄えた。つまり、カホキア遺跡衰退後であり、カホキア遺跡とは関係ない。32haの「プラザ」と呼ばれる中央広場を取り囲むように20のマウンドが築かれ、すぐ北側は川に面する崖、その他の三方を防御壁で囲まれていた。囲まれた地域は、前述のプラザの他、居住区、「公的」施設、土器生産、その他道具の生産の場所に機能的に分割されていたようである。マウンド築造のため3ケ所の池が掘られた（Peebles 1974, pp. 68-9; Steponaitis 1983, pp. 4-6）

遺跡最大のマウンドBは高さ17m、平面プランの面積は1haを誇る。その他のマウンドは高さ8mから1mと規模には差違があるが、頂部が平坦、何回かの段階を経て（一気ではなく）現在の規模に至った点で共通する。発掘されたマウンドはすべて複数の埋葬を伴っており、個人墓は未確認である（Moore 1905, 1907）。副葬品は土器が中心で、カホキア遺跡のマウンド72に比べて貧弱である。

16世紀にこの地域を訪れたスペイン人デ＝ソトDeSotoが残した史料に拠れば、首長はマウンド上に居を構え、一般民衆はそれを取り囲む平地に住んでいたという。実際、マウンドE頂上の発掘調査の結果、東西30m以上、南北18.5m、床面積555㎡以上の大規模建造物、その北壁から5mのところに隣接して、13.8 x 15.5m、床面積214㎡の建造物が検出された（図10）。豪族居館か公共的な建物と推定されている（Knight 2010）。

最後に、北アメリカの先史時代のマウンドの意味を考えるうえで重要と思われる、祭祀用マウンドと祭祀用土塁に触れておきたい。祭祀用マウンドの好例は、オハイオ州南部にあるサーパント・

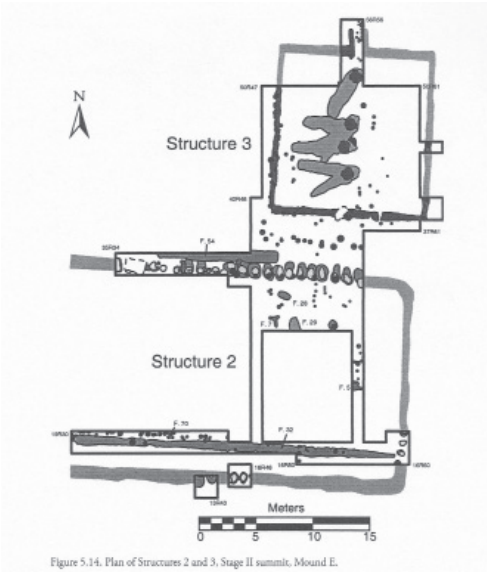

図10　マウンドE頂部の大規模建造物（Knight 2010）

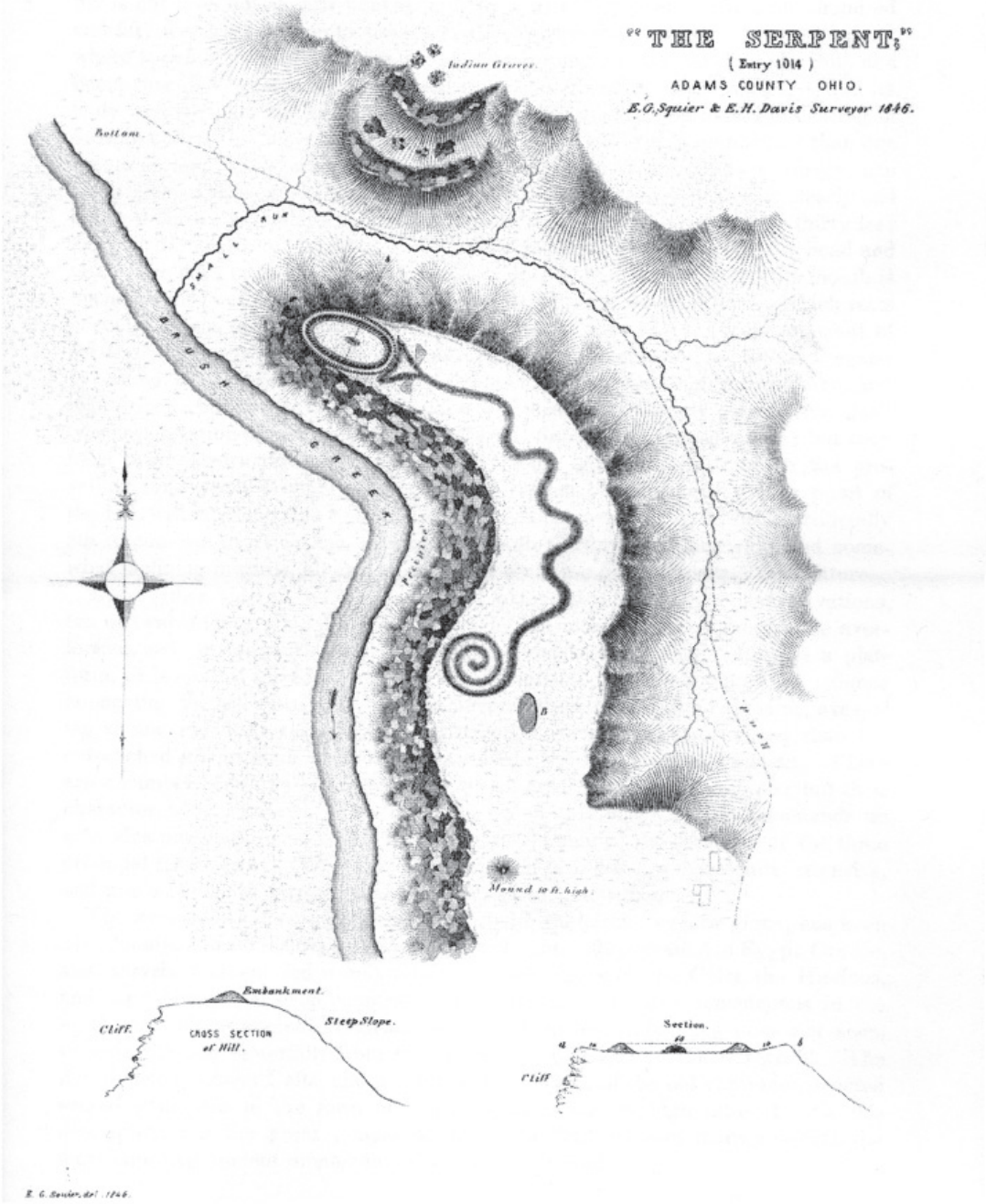

図 11　サーパント・マウンド（縮尺不明）（Squier and Davies 1848）

マウンド（直訳すると「蛇塚」）である（図 11）。サーパント・マウンドは、北アメリカ考古学において「形象墳」effigy mound と呼ばれるマウンドのなかで、全長 411m、高さ 1 ～ 1.5m、幅 6m と最大の規模を誇る。遺跡はオハイオ州南部、ブラッシュ・クリーク Brush Creek 河谷の東岸の比高差 30m の河岸段丘の端部に位置する。地下のレーダー探査の結果、埋葬はなかったようである。遺物が出土しないので、築造年代が長く不明であったが、近年の調査で、紀元前後のウッドランド前期からホプウェル文化の時期を通して、紀元 10 世紀初頭まで 1000 年近くの長期間にわたって築造が続いたと判明した。また築造当初から蛇塚の形状をしていない可能性もでてきた（Herrmann 他 2014）。

このような、「公共工事」的なマウンドと同様の意味を有すると筆者が考えるのが、ウッドランド後期～先史時代末期のミシガン州で築造された大規模土塁である。その一例として、ミソーキー Missaukee 土塁遺跡をとりあげる（図 1 の 8）。遺跡は隣接する 2 基の環状土塁から構成され、西側土塁は直径 48m、東側の土塁は直径 53m を測る。土塁とその外側の堀は東側土塁の方が大きめである。ただし西側土塁の中心に巨石が置かれる。東側土塁に隣接して、内陸部では珍しい泉（湧き水）があって、土塁の選地は意識的であり、その機能は祭祀用と思われる（図 12）。土塁は A.D. 1200-1420 に築造された（Howey 2012, Ch. 5）。

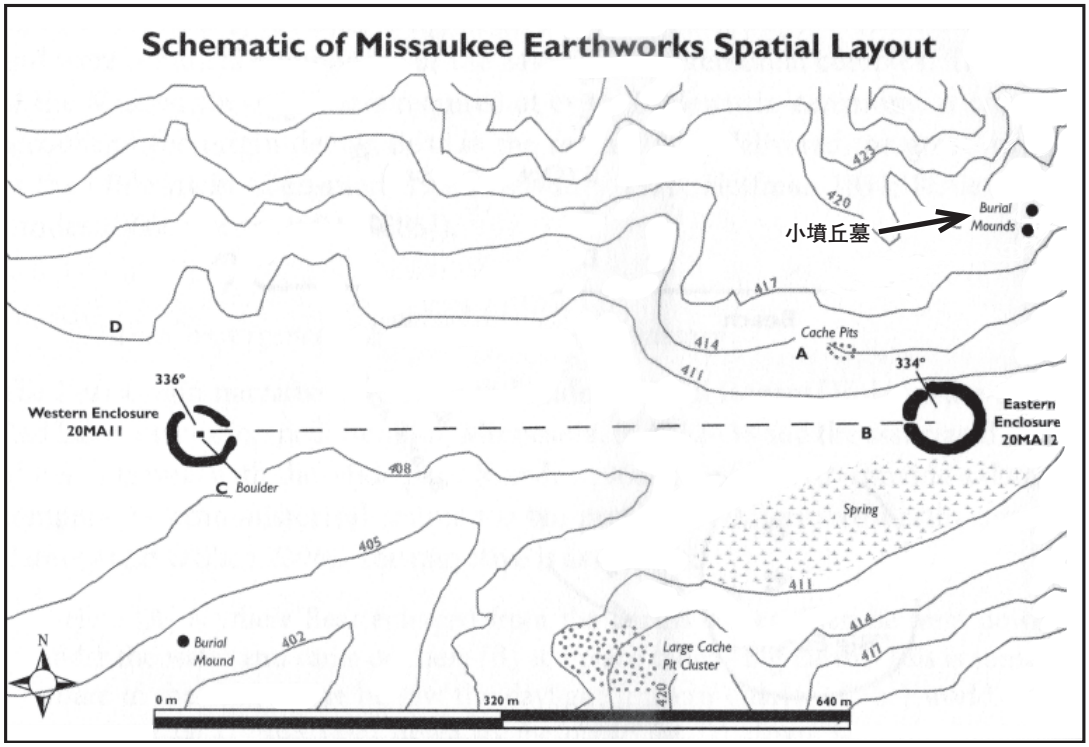

図 12　ミソーキー土塁遺跡（Howey 2012）

また別稿（佐々木 2019）で検討したホプウェル文化のニューアーク土塁遺跡群でも同様の関係が看取できる。土塁は現在でも高さ 2m あって、土塁のすぐ内側には堀が掘られている。その土塁の規模に比して、遺跡群の縁辺部に存在した（すべて削平された）小墳丘墓群の個々の墳丘規模が、スクアイヤーとデイヴィス（Squier and Davis 1848）による測量図（図 8）を見る限り、あまりにも小さいのである。

3. 北アメリカ先史時代のマウンドから見た日本の古墳

本章の冒頭で、日本の古墳の特質として、特定個人あるいは少数の特定個人のための墓、墳丘の定型化あるいは規格性、そして墳丘の巨大性をあげた。こういった日本の古墳の特徴が北アメリカ先史時代でもみられるのだろうか。

まず、少数の個人のための墓という点については、カホキア遺跡のマウンド 72 が好例であるが、例外的と言える。ホプウェル文化、ミシシッピ文化のマウンドの多くが未発掘であるのだが、これまで発掘調査された墳丘墓はすべて、マウンド・シティ遺跡やマウンドヴィル遺跡で顕著なように集団墓である。重要なのは、同一墳丘内に埋葬された人々の間で、副葬品の多寡や埋葬施設の差異が見られないことである。これは、別稿（佐々木 2019）で検討したホプウェル文化のオハイオ州ホプウェル遺跡やミシシッピ文化のジョージア州エトワ遺跡・オクムルギー遺跡でも同様である（図 1 の 6, 7）。もちろん、マウンドに埋葬された人々とそうでない人々との間での社会的格差は存在したのかもしれないが、とにかく、同一墳丘内に埋葬された人々の間で、日本の前方後円墳に見られるような、後円部、前方部、墳丘裾に埋葬された人々の副葬品の多寡や埋葬施設の規模的・構造的差異は北アメリカ先史時代ではなかったようである。

次に定型化・規格性という現象は、北アメリカ先史時代のマウンドでは見られない。北アメリカでも日本でも存在する「円墳」についても、日本では、周濠幅と墳丘直径、横穴式石室全長と墳丘直径に関して一定の規格が存在したことがわかっている（沼澤 2006）。しかし北アメリカ先史時代では、そもそも墳丘に周濠をめぐらすという習俗が存在しないため、円形の墳丘墓の規格性はなかったと考えたい。したがって、最高首長が墳丘築造規格を地方エリートに配布するという現象も北アメリカ、ミシシッピ文化にはなかった。築造規格の配布という現象は、今のところ日本の古墳時代に限って見られる在り方である。

第 3 の巨大性という点については、まず墳丘墓に限って議論したい。一般的に、北アメリカ先史時代の墳丘規模については、巨大性への執着はなかったと言える。これは上述のミシガン州ミソーキー土塁遺跡やオハイオ州ニューアーク土塁遺跡群で顕著なように、公共工事である土塁の巨大性に対して、隣接する墳丘墓の相対的な小規模さが際立っている。カホキア遺跡では、特定少数個人墓であるマウンド 72 が遺跡で最小である現実も示唆的である。したがって、古墳の日本的な巨大性というのは、北アメリカ先史文化では重視されなかったと言える。

また別稿（佐々木 2019）で検討したホプウェル文化のホプウェル遺跡マウンド 25 は 57.6 x

167.6m、高さ 6.4m を測り、巨大と評価できるかもしれない。発掘の結果、少なくとも 102 体の埋葬が検出されたが、マウンド 25 はカホキア遺跡のマウンド 72 と同様、もともと存在した 3 基のマウンドをさらに土盛りして大型の 1 基のマウンドに「増改築」したことが判明している。つまり、マウンドヴィル遺跡の墳丘墓と同様、同一墳丘内に埋葬する人が増えるのに応じて「増築」した結果、墳丘墓が大きくなったと考えられる。これは、特定個人（特定少数個人）のために一気に巨大な墳丘墓を建造した日本の古墳文化とは質的に大きく異なる。

さらに墓ではない北アメリカ先史時代のマウンドにも目を向けると、全面発掘がされていないため断言できないとは言え、カホキア遺跡のマンクス・マウンドは巨大であるが、墳丘墓ではないようである。むしろ、ミシシッピ文化の一地域文化であるフォート・エンシェント文化期に完成したオハイオ州サーパント・マウンド（Serpent Mound 蛇塚）と同様、共同体祭祀用のマウンドの可能性があるのではないか。

最後に、ミシシッピ文化は文化としては広範囲に広がったが、地域色が顕著であり、特定の埋葬習俗が「統一性・画一性をもってあらわれ、各地に［中央から（引用者）］普及するという普遍性をもつ（近藤 1983, p. 189）」ことはなかった。つまり、日本の古墳時代の近畿地方のように、文化の「中央」は認識できないのである。カホキアやマウンドヴィルは、ミシシッピ文化最大と第 2 の遺跡であるが、時期は異なるので、両者に関係は存在しない。埋葬習俗に限っても地域的差異は大きく、マウンドヴィル遺跡では土器の副葬が通有であるが、14 世紀のエトワ遺跡（時期的にはマウンドヴィル遺跡と併行する）では土器の副葬は稀であった。

B. ドイツの墳丘墓（図 13）

ヨーロッパでは紀元前六千年紀（新石器時代前期）に墳丘墓の築造が始まる。それらのいくつかは巨石を用いて墓室をつくり、盛土で覆う構造である。青銅器時代（B.C. 2200-800）には、小規模な円形墳丘墓が時には何百基もの群をなして造営された。その後、墳丘墓は鉄器時代前期（ハルシュタット Hallstatt 期：B.C. 800-450；国家段階以前）になるとふたたび現れ、中部ヨーロッパでは何万基もの墳丘墓が確認されている（Knopf 2018）。鉄器時代の少数の墳丘墓は直径 100m、高さ 14m に及ぶような異例の規模を有しており、礫石で覆われた木組みの墓室には荷車（戦車）と馬具、地中海域から輸入さ

図 13　本文で言及するドイツの遺跡
（『世界の眼でみる古墳文化』p. 9 の地図を改変）

れた青銅製容器や陶器などの貴重品が副葬される。特にドイツ南部（現在のバーデン・ヴュルテンブルグ州とバイエルン州）に集中し、90 以上が知られている（Cunliffe 1997）。

墳丘墓築造の習俗は鉄器時代中期のラ＝テーヌ La Tène 期（B.C. 450 ～ 380）でも続くが、その文化の中心地域がハルシュタット期から変わる以外に、副葬品組成も変化する。ハルシュタット期では、副葬品の武器と言えば狩猟用や見せびらかしのためであったが、ラ＝テーヌ期になると実用の武器が副葬品に多く見られるようになる。戦車と地中海地域の影響を受けて作られたワイン容器の副葬はハルシュタット期からラ＝テーヌ期に継続するが、戦車については、ハルシュタット期では 4 輪、ラ＝テーヌ期では 2 輪のものが副葬される（Cunliffe 1997）。

鉄器時代の大規模な墳丘墓は、1876 年、ホイネブルグ・アン・デア・オーベレン・ドナウ Heuneburg an der oberen Dnau で農業のために墳丘を削平する過程で多くの金や青銅の遺物が発見された際、ヴュルテンブルグの考古学者エードゥアルト・パウルス Eduard Pauls によって「領主墓」と概念化された（Biel 2003）。

墳丘墓の築造は歴史時代にも続くが、A.D. 600-1000 頃の中世前期・ヴァイキング時代に、キリスト教の受容と共に墳丘墓築造の習俗は終焉を迎える。この点は、仏教の伝来が日本の古墳築造の終焉を促進した現象と共通する（Knopf 2018）。

1. マグダレーネンベルグ Magdalenenberg

マグダレーネンベルグはハルシュタット期の 616 B.C. に築造された中部ヨーロッパ最大の円形墳丘墓で、単独墳である（図 14）。その規模は直径 100m、高さ 13m を誇る。正確な築造年代は、中心埋葬である木組み墓室の樫の年輪年代である。中心埋葬（図 15）は盗掘され、副葬品はあまり残っていなかったが、車輪の一部と馬具、椅子かベッドの一部、スカンジナビア地域から輸入された琥珀、バルカン半島から輸入されたフィブラ fibla（装飾付きピン）が残っていた。人骨も残っており、身長 1.75m で当時としては背の高い人物であった。また右腕の筋肉が発達していたので、弓を使っていたことが推定された。中央の木組みの墓室の他に、129 の追葬があった（図 16）。追葬は火葬と土葬（伸展葬）2 種類あって、火葬の方が古いことが分かった（Knopf 教授のご教示による）。中心に埋葬された「王侯」のための墓とはいえ、2 世紀にわたって追葬を繰り返した結果としての大規模墳丘である。墳丘築造のための土は牛で運んだらしく、牛糞も考古学的に検出された。

図 14　マグダレーネンベルグ（筆者撮影）

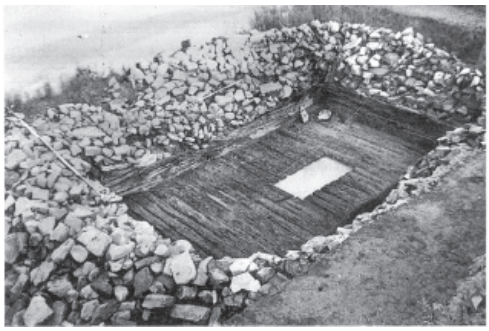

図 15　マグダレーネンベルグの中心埋葬
（Cunliffe 1997, Fig. 35）

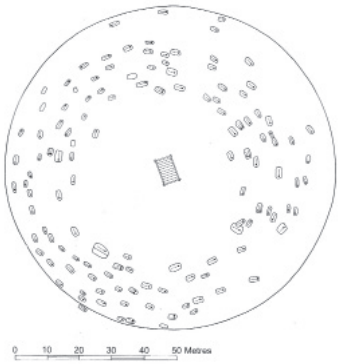

図 16　マグダレーネンベルグの埋葬
（Knopf 2018, p. 28）

2. ホーミヒェル Homichele

ホーミヒェルは紀元前 6 世紀後半（ハルシュタット期）に築造された直径 100m、高さ 12m の墳丘墓である（図 17）。農地ではなく、森の中に残っていたため、墳丘はよく残っていた。1937 年から 1938 年にかけて全面発掘された（図 18）。中心埋葬のほかに多数の追葬を繰り返した結果（図 19）としての大墳丘となったことはマグダレーネンベルグと同様である。これをカンリフ（Cunliffe 1997, p. 53）は、死んだ王侯との系譜関係を「記念物化」monumentalizing the lineage した所産と解釈する。女性の被葬者は中国製の絹織物を着用していた（Cunliffe 1997, p. 53）。

図 17　ホーミヒェル（筆者撮影）

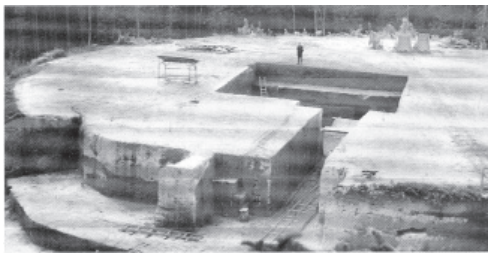

図 18　ホーミヒェルの 1930 年代の発掘調査
（Cunliffe 1997, Fig. 33）

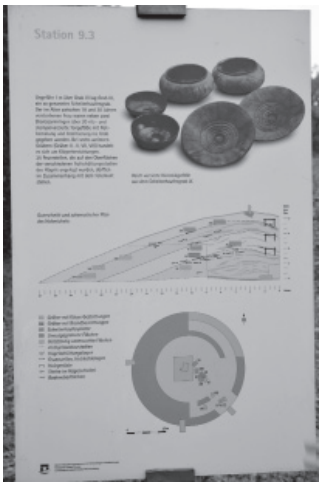

図 19　ホーミヒェルの墳丘断面図
（遺跡の説明看板を筆者撮影）

3. ホッホドルフ Hochdorf（Biel 2003）

ホッホドルフは540 B.C.頃（ハルシュタット期）に築造された、直径60m、本来の高さ6mの墳丘墓で、単独墳である（図20）。1970年代に地元のアマチュア考古学者が発見したときは、高さ50cmまで削平されていた。発見後、1978年から1979年にかけてバーデン・ヴュルテンブルグ州文化遺産局によって、当時最高の技術により発掘された[3]。中心埋葬が未盗掘であったため、埋葬のプロセスや墳丘築造工程に関して、他では得られないような貴重なデータを非常に多く得ることができ、領主墓あるいは王侯墓の調査の教科書例とされる。ホッホドルフ墳丘墓は、いわゆる首長居館が存在したホーエンアスペルグ Hohenasperg 遺跡の西、10kmに立地する。現在でも、墳丘の墳長から、ホーエンアスペルグ遺跡が立地する小高い丘を視認することができる。

図 20　ホッホドルフ（筆者撮影）

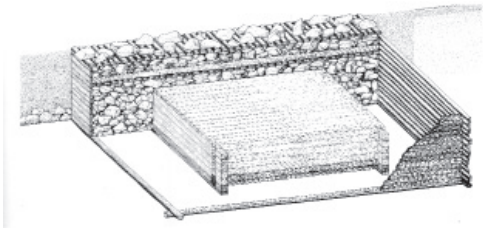

図 21　ホッホドルフの中心埋葬復元図
（Cunliffe 1997, Fig. 46）

中心埋葬（図21）は、深さ2.5m、縦横11 x 11mの竪穴のなかに、丸太造り4.6 x 4.7mの墓室が設置された。丸太は樫材であるが、若干加工されていた。この墓室は小部屋によって囲まれており、北側には高さ1.5mの祭壇があり、またこの壇には石材で作られた入り口が備わっていた。樫材の墓室は250トンの石材で覆われており、その石材はホッホドルフから3km離れたところから運搬された。

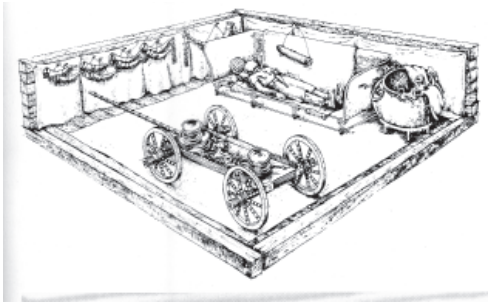

図 22　ホッホドルフの中心埋葬の内部復元図
（Cunliffe 1997, Fig. 47）

死者は身長1.85m、並外れて体格の良い男性で、40歳前後と推定される。死因となるような怪我や病変は骨には残っていなかった。遺体は布にくるまれ、白樺樹皮で作られた装飾付き帽子、身分を示す黄金の首飾り、青銅製の装飾付き鞘に入った短剣、青銅製のプレートで装飾された革ベルト、つま先が嘴状の靴を身に着けていた。木製の櫛、剃刀、爪切り、矢を伴う矢筒、特に3本の釣り針は、日常生活の一部であった。この3本の釣り針は、

死者の趣味なのかもしれない。ベルト、短剣及び靴は、金の板で覆われていた。また2つのフィブラ（飾りピン）と1つの腕輪は、副葬のために製作された新品である。

特筆すべきは、死者が青銅製のベッドというよりソファーに安置されていたことである（図22）。このようなソファーは今日まで他に発見例はない。ソファーは2.75mの長さを有する。側面部分と背もたれは、車列及び剣舞が描写された、打出された場面によって装飾が施されている。ソファーの8本の脚は、青銅から鋳造された、両手をあげてソファーを支える女性像となっている。これら8体の女性像の足は車輪となっており、ソファーを容易に回転させることができる。ソファーは饗宴のための調度品の一部であるが、上部イタリアからの強い影響下で作られた。

領主墓あるいは王侯墓の多くは、饗宴が墓室で行えるようになっており、ホッホドルフも例外ではない。副葬品として、墓室の南側の壁には、9つの角杯が掛けられていた。この角杯の1つは、鉄板から形成され、5ℓの容量があり、黄金によって装飾が施されていた。そのほかの8つはヨーロッパヤギュウの角そのもので作られている。さらに青銅製ソファーの隣に、高さ80cm、容量400ℓの大きな青銅製の釜も置かれていた。分析によると、釜には400ℓの蜜酒が満たされていた。この釜はイタリア南部のギリシャ工房で製作されたことがわかっている。被葬者がホーエンアスペルグで生前政務を司っていたときにもたらされたものであろう。

墓室の、ソファーの反対側には4輪の荷車が置かれていた。後期青銅器時代以来、他の領主墓・王侯墓にもこのような荷車が副葬されるのであるが、ホッホドルフ例は、荷車のボディーのフレームや車輪が装飾された薄い鉄板で覆われているので、ホッホドルフの遺跡博物館では「戦車 chariot」と説明している。その戦車の荷台の上には9枚の青銅製の皿、3枚の盆及び動物を畜殺するための斧のような道具が積み上げられていた。戦車は軛を伴っており、2頭立てであることは推定できるが、馬は副葬されていなかった。最終的に、墓室は高価な布で覆われ、花によって装飾されていた。同様に副葬品も布で覆われていた。

ホッホドルフ墳丘墓には、以上の中心埋葬の他に、墳裾に2基、中心近くにもう1基、合計3基の埋葬を伴っていた。これら3基には墓室はなかった。

ホッホドルフ墳丘墓付近にはプファフェンヴァルド Pfaffenwald 小墳丘墓群（図23）があって、ホッホドルフの中心に埋葬された王侯をこの地域の最高首長とすると、第2ランクのエリートたちが埋葬されたと考えられる。ホッホドルフ中心埋葬から比べると貧弱な副葬品が、墳丘規模の小ささと、また単独墳と群集墳との差異との相関関係があって、当時の社会構造を反映していると考えてよい。

図23　プファフェンヴァルド小墳丘墓群（筆者撮影）

4. グラウベルグ Glauberg（Herrmann 2003, Baitinger and Herrmann 出版年不明）

グラウベルグ墳丘墓（図 24）もホッホドルフ墳丘墓と同様「初期ケルト時代の領主墓（Herrmann 2003, p. 196）」とドイツ考古学界で評価されている。墳丘墓は紀元前 5 世紀、初期ラ＝テーヌ La Tène 時代（B.C. 450 ～）に築かれた。墳丘は直径 48m で、幅 8.5 ～ 14m の堀で囲まれる（堀で囲まれた直径は 68.25m）。堀の深さは、今日の地表下 2.20 メートルから 3.70 メートルの間で多少変わる。墳丘は両側を堀で区画された、発掘担当者が「行列通り」と呼ぶ道路状遺構にそのままつながる（周濠がその両側の堀につながる）。この行列通りを画す両側の堀は平均 10.20m の幅、2.80m の深さ約を有し、先端部分で幅が 6.70m と先細りの形状を呈している。堀から掘り出された土砂は、両側に塁壁として築かれたと推測できる。

図 24　グラウベルク（筆者撮影）

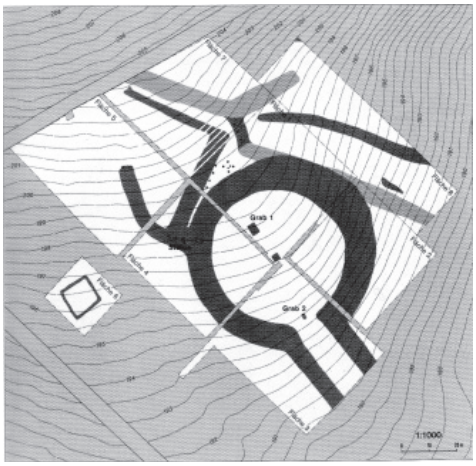

図 25　グラウベルク遺跡の平面図
（Herrmann 2003, Fig. 3）

墳丘では 2 基の墓穴と、遺物を伴わない 1 基の穴が検出された（図 25）。墓 1 は墳丘の北西部、墓 2 は南東部に、穴は墳丘のほぼ中央に位置している。墓 1 が最初の埋葬と推定されるが、根拠は十分とは言えない。

墓 1（図 26）は深さ 2.5m、上面で 4 x 2.9 m の大きさ、底部では 3 x 2.1m の大きさであった。上部は礫石で覆われていた。礫石の下には樫材の木組みの墓室があって、発掘時にはその墓室の木材が腐敗し、礫石群の中央部が沈下していた。墓室の規模は 2.25 x 1.07m、高さ 0.8m であった。供えものとしては、青銅製注口容器が墓室の南東隅に置かれていた（1、以下、図 26 中の番号）。中にはお酒が満たされていた。墓室の床面は、革によって覆われていた。また全ての副葬品は布で包まれていた。その上に、すべての上に布が広げられてかけられていたと推定される。

被葬者は身長 1.69m の 28 ～ 32 歳と推定される男性で、頭を南東にした伸展葬であった。死者の右側には、鉄剣が置かれていた（16）。また死者の左側には、鉄製の槍先を備えた 3 本の槍が置かれていた（17-19）。左側にはさらに、革の容器に入った状態で、3 本の矢が入った矢筒及び木製の弓が置か

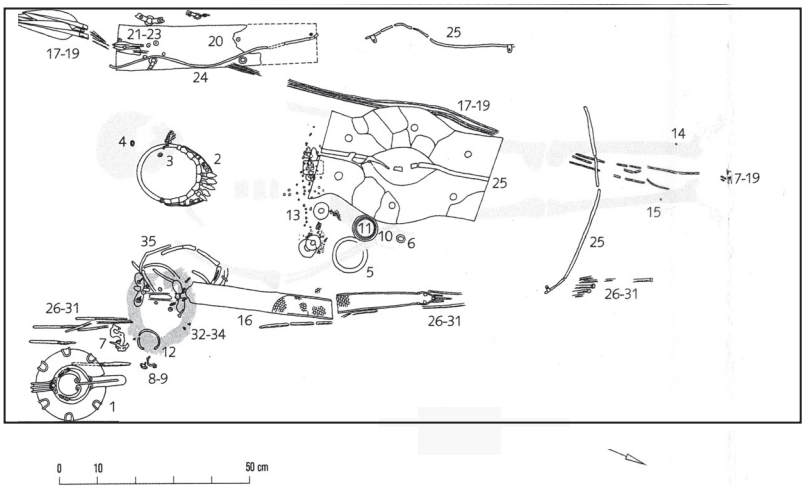

図 26　グラウベルク墳丘墓の墓 1（Baitinger and Herrmann 出版年不明 , p. 22）

れていた（20-24）。遺体の上には、木製革張りの楯が置かれていた（25）。楯の下部及び側面には鉄製の縁取り金具が、また楯の中心には星が装飾されていた。

死者の衣服は残っていなかったが、青銅の縁飾りを伴う革ベルトを着用していた。履物にあたる部分では、小型の青銅製の鋲、鉄の残り、布地の残り、革の残りが発見された。また、2 つの金製耳輪（3, 4）、豪華に装飾を施された金製首飾り torque（2）、手首の関節部分に腕輪、右薬指に指輪を装着していた。さらに 2 つの青銅製の腕輪（10, 11）が骨盤付近で、3 つ目の腕輪（12）が剣の柄付近で検出された。同様にここには、3 つの青銅製のフィブラ（飾りピン）（うち、2 つは鳥形、1 つは動物形）が下に置かれていた。そのほか、何に使われたかわからない副葬品もいくつか検出された。

墓 2 は「行列通り」に面した墳裾に位置し、2.3 x 1.2m の長方形で、墳丘構築面から 1.4m の深さを測る（図 27）。墓壙内には、長さ 1.30m、幅 0.60m の大きく平らな桶状の木製骨蔵器がおかれていた。蓋を有さず、布地または毛皮（革）によって覆われたこの木製の容器内に、遺体の残骸及び副葬品は存在した。

被葬者は火葬され身長 1.69m、30 ～ 40 歳と推定される男性であった。鉄剣（9、以下、図 27 中の番号）と 3 本の槍（鉄製槍先のみ検出）（10-12）、また剣に固定された形で 4 本目の槍先（13）が検出され、被葬者は戦士と推定される。バックルや小さな鎖を伴

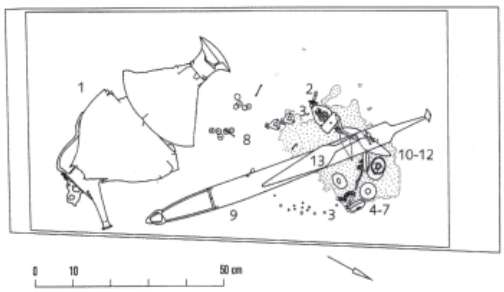

図 27　グラウベルク墳丘墓の墓 2
（Baitinger and Herrmann 出版年不明 , p. 22）

い、鋲で覆われたベルトが火葬骨の腰部分に置かれていた。その他、青銅製の皿４枚（4-7）、青銅製飾りピンが検出された。墓１と同様、供えものとして高さ 50cm 以上の青銅製注口容器（1）が骨蔵器の南側で検出された。注口容器はハチミツ酒によって満たされていた。

グラウベルクをヨーロッパ中に有名にしたのは、等身大の石製戦士像の発見である（図28）。ハルシュタット期・ラ＝テーヌ期考古学の概説書であるカンリフ著 *The Ancient Celts*（1997）の裏表紙はこの石像の検出状況の写真であるし、1998 年に日本で開催された「ケルト美術展」でも、フライ（Frey 1998）が写真と共に紹介している。石像は合計４体発見され、内１体がほぼ完形である。ほぼ完形の１体と２体目、３体目の破片は墳丘の西側、周濠が西方と北方へ３分岐するところで発見された。４体目（頭部破片）は発掘作業終了後にこの付近の畑地で発見された。全ての石像は、その地方の斑砂統から作られている。斑砂統の最も近い鉱脈は、発掘位置から約３キロメートル離れている。

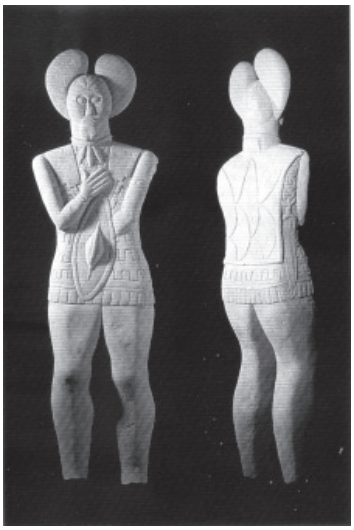

図 28　グラウベルク墳丘墓周濠出土の石製戦士立像
（Baitinger and Herrmann 出版年不明 , p. 29）

ほぼ完形の石像は足を欠くものの、現状で 1.86m、頭頂部まで 1.74m の高さを有し、重さ 230kg を測る。石像は戦士を描写している。この戦士は、真麻または革か、おそらく両方の素材を組み合わせた鎧を身につけていた。背中ではこの鎧の上に、葉状の図柄によって装飾を施されたベスト状の衣類を羽織っているが、これは肩で垂れ革及び肩章と接続されているようで、鎧本来の構成要素であろう。戦士はその左手に紡錘形のフレームを伴う長円形の盾を体の前に持っている。正面から見ることができない戦士の右手に、戦士は剣を持っている。右手は、外見において胸に置かれている。装身具及び同時に戦士の権力の表章として、戦士はつぼみ状の３つの装飾を伴う１つの首飾り torque、右手首に１つの腕輪、右手薬指におそらく黄金製と考えられる指輪、左上腕に３つの腕輪を身に着けている。大きな目をもち、口髭及びあご髭を生やしている。さらに２枚の大きな葉がついた帽子、所謂リーフクラウンを着用している。フライ（Frey 1998）によると、この２枚の葉は神の標識であるという。フライ（Frey 1998）はこの石像について、「死者を英雄として表現し、地中海域の鎧、楯・長剣を装備し、ケルトの貴族の標識である首飾り（トルク torque）、複数の腕輪、指輪をつけている。」と説明する。

5. ドイツの墳丘墓のまとめ

日本の古墳の特質として、特定個人あるいは少数の特定個人のための墓、墳丘の定型化あるいは規格性、そして墳丘の巨大性をあげた。こういった日本の古墳の特徴がヨーロッパ地域で「盟主墳」とも評価できそうな大規模な墳丘墓が築かれるドイツ南部、紀元前6～5世紀の鉄器時代（ハルシュタット期後期～ラ＝テーヌ期前期）でもみられるのだろうか。

まず特定個人あるいは少数の特定個人のための墓という点については、マグダレーネンベルグやホーミヒェルは明確な中心埋葬を有する点で、当初は特定個人墓として築かれたと考えてよい。これは同一墳丘内の埋葬がほぼ均質なホプウェル文化やミシシッピ文化とは区別される。また、ホッホドルフ墳丘墓やグラウベルク墳丘墓は、各々直径60m、48mの規模を有していながら、特定個人のための墓であることも見逃せない。重要な点は、埋葬の差異が被葬者の生前の社会的地位の差異を反映している可能性が高いことであろう。特にホッホドルフ墳丘墓は、付近のプファフェンヴァルド小墳丘墓群との比較に基づいて、その可能性を強く裏付ける。

墳丘の定型化・規格性という点については、マグダレーネンベルグやホーミヒェル、ホッホドルフなど基本的に周濠を伴わない円墳のみであり、規格性を想定することは困難である。しかしながら、巨大性という点については、マグダレーネンベルグやホーミヒェルは直径100mの「円墳」であって、日本最大の円墳である富雄丸山古墳に迫る規模を有しており、巨大と評価してもよい。ただこれらの巨大さも、北アメリカのホプウェル文化やミシシッピ文化のマウンドヴィル遺跡と同様、追葬を長期間にわたって重ねた結果の巨大さであり、特定個人のために大規模墳丘を一気に築いた日本の古墳とは区別されるべきである。追葬を重ねたマグダレーネンベルグやホーミヒェルにみられる習俗の類例を日本の古墳文化で強いて考えるとすれば、例えば長野県千曲市森将軍塚古墳の墳裾に小埋葬施設が1世紀にわたって営まれ続ける現象をあげてもよいかもしれない。しかし、森将軍塚の場合も、主たる前方後円墳は後円部竪穴式石室に埋葬された人物のために一気に築造されたものであり、その後に増築されることはなかったから、やはりマグダレーネンベルグやホーミヒェルを同一俎上で比較するのは適切ではないと思う。

最後に、ハルシュタット文化全体、ラ＝テーヌ文化全体のなかでの「中央」を墳丘墓のあり方から抽出、認識するのは不可能なようだ。ミシシッピ文化と同様、マグダレーネンベルグ、ホーミヒェル、ホッホドルフの中心埋葬とグラウベルク墳丘墓の墓1の被葬者は、地域首長であっても、ハルシュタット文化全体、ラ＝テーヌ文化全体の最高首長ではありえない。「領主墓」という表現がドイツ考古学界で使われる所以であろう。

Ⅱ． 古墳時代考古学の方法論

古墳時代考古学の方法論の顕著な側面は、墳墓の形態と規模の差異に基づいて古墳時代エリート層のなかでの階層差や、中央（畿内）と地方豪族との社会的地位の上下関係を推測する点である。具体

的には、前方後円墳→前方後方墳→円墳→方墳という墳形の違いは、被葬者の生前の階層差の反映とする。また同じ墳丘形態であっても、規模の差も被葬者の生前の階層差の反映と捉える（例えば都出1989b）。これは単なる憶測ではなく、考古学的根拠に基づいている。

こういった「階層性」が明瞭な奈良盆地の前期古墳を例にとってみよう。古墳時代前期には、全長200m以上の前方後円墳は310mの渋谷向山古墳、280mの箸墓古墳、242mの行燈山古墳、234mの西殿塚古墳がある。それに対し、日本最大の前方後方墳は183mの天理市西山古墳（ただし、1段目のテラスより上段は前方後円形）である。奈良盆地南東部の他の前期前方後方墳は145mの波多子塚古墳、115mの下池山古墳、110mのフサギ塚古墳など、全長150mに達するものはない。前期の最大（古墳時代を通じて日本最大）の円墳は奈良市富雄丸山古墳で、直径109mを測る。つまり前方後円墳の被葬者は前方後方墳の被葬者より、また前方後方墳の被葬者は円墳の被葬者より、より大きな労働力の自身の墓の築造のために投入できたことがいえる。埋葬施設についても富雄丸山古墳は粘土槨であり、竪穴式石室を有する下池山古墳より単純な構造であって、埋葬施設構築に必要とされる技術力・労働力も小さくて済む。

また奈良盆地の前期前方後円墳のなかでも、墳丘規模の差異と副葬品の多寡に明瞭な相関関係があって、墳丘規模の差異も古墳時代当時にも意味があったと考えられる。例えば、全長207mの桜井茶臼山古墳後円部竪穴式石室には内行花文鏡9面、三角縁神獣鏡26面を含む81面以上の鏡が副葬されていた。それに対し、全長132mの天理市黒塚古墳の未盗掘の後円部竪穴式石室には三角縁神獣鏡33面と画文帯神獣鏡1面が棺外と棺内にそれぞれ副葬されていた。

さらに御所市鴨都波1号墳は一辺20mの前期の方墳で、未盗掘の状態で発掘されたが、副葬された鏡は三角縁神獣鏡4面のみであった。また埋葬施設は、構造の簡単な粘土槨であり、個人墓築造のために投下された労働力という点でも、方墳は前方後円墳、前方後方墳より下位に位置づけることは妥当であろう。

以上のような古墳時代考古学の知見が20世紀には英語圏に知られていなかったため[4]、また1960年代にアメリカ考古学界で流行したプロセス考古学において、葬制の差異に基づく先史時代社会構造の再構築（例えばBinford 1971）があまりにも楽観的であったため[5]、この種の方法論については、1980年代以来、イギリス人の、特にポスト・プロセス学派に属する考古学者から批判があった。例えば、現代イギリス社会において低い地位におかれているジプシーの人々がほかのイギリス人よりも立派な墓に葬られている（一般的なイギリス人が埋葬に平均£500支出するのに対し、ジプシーの人々は£3000支出する）事例をあげて、考古資料から社会構造を仮説的に再構築することの困難をパーカー＝ピアソン（Parker Pearson 1982）は説く。

実はドイツ語圏の考古学界では、イギリスとは違った日本的な解釈が受け入れられていることを今回認識した。例えば、ホッホドルフ墳丘墓は盟主墳、この地域の最高首長の墓と考えられており、その付近のプファフェンヴァルド小墳丘墓群は第2ランクのエリートたちが埋葬されたと考えられる。つまり、ホッホドルフ中心埋葬から比べると貧弱なプファフェンヴァルド小墳丘墓の副葬品が、墳丘規模の小ささとの間での明瞭な相関関係があって、当時の社会構造を反映していると評価できるので

ある。したがって、イリギリスのポスト・プロセス学派の一部の研究者の批判は必ずしもあたらないと考えるようになった。

ただポスト・プロセス学派の批判も、ブリテン島の新石器時代の埋葬の考古学的知見に基づいていることも確かである。ひとつの墳墓に長期間にわたり、結果として数百体埋葬される新石器時代の実例に基づいて、社会構造を議論することは難しい。ブリテン島の新石器時代はすでに首長制段階（国家の前段階）であったというレンフルー（Renfrew 1973）の主張に関して、「集団性の追認と個人・個人差の否定を通して、差異化された社会の意識的隠ぺいのシンボル」としての記念物的墳墓というウィトル（Whittle 1985, p. 235）の議論は苦しい。ウィトルがこの議論を述べる数行後に正直に告白するように、墳墓と集落の空間的関係を明らかにしないと社会構造にアプローチできないであろう。

実際、墳墓の調査成果に大きく依存する日本の古墳時代研究について、集落の調査成果に基づいて社会構造に迫らないのかという疑問を、メソポタミアをフィールドとするハーヴァード大学人類学科のジェイソン・ウル Jason Ur 准教授から受けた。実は、メソポタミアだけでなく、メソアメリカもそうである。これらの地域では、砂漠に集落遺跡が埋もれることなく地表に突出して残っており（メソポタミアのテル）、遺跡の規模と大規模な遺跡は少数であることに基づいて社会が 2 階層、3 階層と解釈するのである（佐々木［2011b］が日本語で紹介）。

こういった研究法は、集落遺跡が地表に突出して残らない北アメリカ南東部でも同様である。ミシシッピ文化のカホキア遺跡を中心とする地域の集落構造は、カホキア遺跡を頂点とした 4 層構造に復元する研究者もいる。第 2 階層は複数のマウンドをもつ面積 50ha 以上の比較的大きな遺跡で、周辺に 4 か所知られている。第 3 階層はマウンドを 1 基のみ伴う集落で、5 か所知られている。第 4 階層の集落はマウンドを伴わない農村である（Fowler 1978）。

同様に、マウンドヴィル遺跡を中心とした半径 25km の地域も、集落構造が 3 階層に復元されている。周辺にはマウンドをひとつしか有しない同時期の集落 10 か所が確認されている。これらはマウンドヴィルに居住する首長の統治下・影響下にあった各地域の中心集落と解釈され、さらにこれら 10 遺跡のそれぞれを取り囲むようにマウンドをもたない多数の村々が存在していたと推定されている（Peebles 1978）。因みに墓制の面からもマウンドヴィル遺跡内で、墳丘墓に葬られる者、墳丘墓以外の土壙墓に葬られる者といた階層差が存在したと推定されている（Peebles and Kus 1977）。

そういう意味で、墳墓だけから社会の階層構造を再構築する日本の古墳時代研究は、世界の中でやや特殊かもしれない。とはいえ日本の古墳時代研究者も言い分があって、古墳時代集落は、豪族居館遺跡を除くと地域的差異や時間的変遷が明瞭ではなく、集落に基づいて社会構造にアプローチするのが困難な現状である。イギリスの考古学者が墳墓だけに基づいて先史時代社会構造を議論するのが難しい現実と共通している。

文字資料が存在しない、ほとんどない時代の社会を再構築するには、埋葬に限らず、集落その他、ありとあらゆる考古資料を総動員して、総合化するのが理想であろう。その点において、群馬県高崎市域は、大型前方後円墳、小円墳群、大型前方後円墳に埋葬されたであろう地域首長が政務や儀礼を生前司っていたであろう豪族居館遺跡、地域首長が地域社会を活性化させるために新技術導入を依頼

したであろう渡来人の墓と生活痕跡、彼らの生活を支えた水田、灌漑施設遺跡がセットで調査されており、その調査成果に基づいた若狭徹（2015）の研究成果は非常に説得力がある。

まとめ ― 北アメリカ、ドイツ南西部の墳丘墓と日本の古墳との比較を通じて

ここで近藤義郎（1983, p. 189）がリストした日本の古墳、特に前方後円墳の特質を改めて挙げると、「統一性・画一性をもってあらわれ、各地に普及するという普遍性」、「墳丘の前方後円形という定型化とその巨大性」である。また近藤が言及した「鏡の多量副葬指向」と「長大な割竹形木棺」については、前方後円墳の場合、後円部の埋葬施設を特に指す属性であって、前方後円墳は後円部に埋葬された被葬者のための特定個人墓とする根拠と本稿では捉えて、「特定個人墓」を日本の古墳の特質として本稿では扱った。

第1に、特定個人墓は北アメリカのミシシッピ文化でもドイツの鉄器時代でも存在したことは確かである。しかしながら「巨大性」と絡めると、つまり「巨大な特定個人墓」となると、中国やエジプトでは存在したが、北アメリカやヨーロッパでは出現することはなかった。鉄器時代ヨーロッパと北アメリカ、ミシシッピ文化の大型墳丘墓は、追葬を繰り返した結果である。強いて言うと、ドイツのハルシュタット期ホッホドルフ（直径60m）とラ＝テーヌ期グラウベルク（直径48m）が比較的大型の特定個人墓に相当しようか。北アメリカのミシシッピ文化カホキア遺跡における特定個人墓のマウンド72は遺跡で最小のマウンドである現実に注意したい。

ここで、このような日本の古墳の特質はどこに由来するのかについて触れておきたい。「巨大性」と前方後円墳は日本独自の可能性が高いが、特定個人のための厚葬墓という習俗は中国から伝わった可能性が極めて高いことを都出比呂志（1989a）がすでに主張している。その根拠は、1）祭天の儀式の場の郊祀制の円丘が三段築成（日本の古墳にも三段築成が多い）、2）古墳が最初に出現した畿内の埋葬北頭位が優位（中国もそう）、そして3）竪穴式石室の密封性も漢の墓からの影響。都出より直接指導を受けていた1990年代前半、筆者は内心、賛同できなかった。しかし、特定個人のための厚葬墓という習俗が世界史上普遍的ではなく、エジプトやメソポタミアを除いて、日本の近隣でそのような習俗が存在した地域は中国とその影響を強く受けた朝鮮半島であり、このようなやや特殊な習俗の起源は中国と考えざるを得ない。都出が示した上記1）～3）の根拠、特に1）はこじつけに近い面もあるが、1980年代に都出はヨーロッパ先史時代の墳丘墓を見学しており、また1993年の在外研究はイギリスのケンブリッジ大学で過ごしており、「特定個人のための厚葬墓」という習俗が中国由来というのは、都出の比較研究に基づいた卓見であろう。

特定個人のための古墳という現象に密接に関連することだが、墳形と規模の差異は、副葬品の多寡と明確な相関関係があって、古墳時代社会における埋葬の差異が、被葬者の生前の社会的地位の差異を反映していた可能性が高いといえる。これは、鉄器時代のヨーロッパ大陸地域、ミシシッピ文化でも階層差は埋葬の差異に反映されたようで、同様である。イギリスでは否定的であるが、むしろブリテン島が特殊なケースではなかろうか。イギリス人研究者は英語で発信するので、その影響力は日本

語・ドイツ語を母語とする研究者より大きいのである。イギリス人のポスト・プロセス学派からの批判を無視してはいけないが、賛同する必要もないことを北アメリカ、ドイツの墳丘墓を見学して強く認識した。

第2に、「定型化」、「普遍性」という特質は、日本の古墳文化独特と考えたい。墳丘の「定型化」と「普遍性」の背景には、古墳文化の中心地、すなわち中央の王権が特定の埋葬習俗を各地に広めたメカニズムを想定できる。古墳時代の「中央」の地方への影響力、あるいは地方とのネットワークの広さを裏付けるのが、三角縁神獣鏡の同笵鏡の配布（小林 1961）であり、また中央の王権が地方豪族に古墳築造設計図（築造規格）を配布した可能性もこれと同じ現象と考えられる。しかし、大型墳丘墓に埋葬された人々の「ネットワーク」のようなものは国家段階以前のミシシッピ文化、鉄器時代ヨーロッパ大陸地域ではなかった。ミシシッピ文化でも鉄器時代ヨーロッパ大陸地域でも、大型墳丘墓に埋葬されたエリートの「支配」領域は小さかったよう（地域で完結していた）で、古墳時代とは明確に区別できるのである。

小林行雄（1961）は自身による三角縁神獣鏡の分有関係の実証的分析に基づき、古墳時代前期以来の「強い中央」を想定した。しかし、三角縁神獣鏡同笵鏡や古墳築造設計図の配布は、強大な王権の存在を必ずしも示唆するものではない。そもそも、首長の持ち物のコピーを共同体一般成員が受け取ることで社会内の上下関係を強くするという現象はニュージーランドの先住民マオリ族の民族誌から知られる現象で[6]、文化人類学の分野で「不可譲の富 inalienable wealth」として概念化されている（Weiner 1992）。マオリ族の社会構造を考えたとき、強大な中央の王権の存在を想定する必要はない。むしろ、古墳時代の中央の王権が強くなかったからこそ、このような形で広域ネットワークを維持する必要があったのではなかろうか。

最後に、古墳時代と鉄器時代ヨーロッパ大陸地域と共通するのは、仏教、キリスト教の受容に伴って墳丘墓築造の習俗が終焉を迎えることである。これとは逆に、古墳出現に関して、東国の古墳研究に大きな役割を果たした岩崎卓也（1984）が「古墳出現期の一考察」と題した論文の註で「大和の優位性は、宗教的優位性にあったのではないかと憶測している」と述べている。筆者も同感である。もし中央のヤマト王権が小林行雄（1961）や都出比呂志（1991 など）が想定するほど強大でないとすれば、なぜ各地の豪族たちが前方後円墳を築いたのであろうか。ケンブリッジ大学で 2018 年 1 月に講演したときに、このような質問を受けた。考古学的に検証できないのであるが、宗教の力は非常に強く、巨大モニュメントを築造するために共同体の労働力を結集するのは難しくないようだ。アメリカ合衆国やドイツの遺跡を見学するために車に長時間乗り続ける途中に通過する町が、いかに小さな町であれ教会は非常に立派なのである。古墳時代の東国でも 5，6 世紀には大きな前方後円墳を築くようになるが、古墳築造に参加することが翌年の豊穣につながる、といった信仰心の所産としての古墳築造の可能性も敢えて提起しておきたい。

謝辞

ドイツの墳丘墓見学には、チュービンゲン大学のトマス・クノフ教授が車を出してくださった上、様々なご教示を賜った。ホプウェル文化、ミシシッピ文化に関する文献渉猟については、ハーヴァード大学ピーボディ人類学博物館　元館蔵品部長スティーブン・レ＝ブランク博士とオハイオ州立大学人類学科教授のロバート・クック博士よりご助言を賜った。マグダレーネンベルグとホーミヒェル遺跡を見学したのは2015年11月、ホプウェル遺跡・エトワ遺跡・オクムルギー遺跡を見学したのは2018年10月、共に大阪大学の福永伸哉先生の科研「日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開」の一環である。本稿の論点を補強するために、その際の勉強の成果をここで使わせていただいた。ドイツ語文献の読解では出縄祐介氏の助力を得た。以上の方々に厚く御礼申し上げます。

後　注

1　マンクス・マウンドを直訳すると「僧侶の塚」という意味であるが、これは19世紀にこのマウンドの隣に僧侶が住んでいたことに基づき、マウンドの機能・性格とは関係がない。

2　原語はearthworkである。とりあえず「土塁」と訳すが、日本語の土塁には軍事的な意味合いがあるので、「土塁」と訳すのは必ずしも適切ではない。

3　これを言うのは、ホーミヒェルの発掘が1930年代であり、当時の技術ではやむを得ないのだろうが、発掘というより「乱掘」であったからである。

4　筆者はイギリス人考古学者の批判に十分認識しているため、21世紀に入り、墳丘形態・規模の差異と副葬品の多寡との間に明確な相関関係がみられることを英語での論考では強調し、現代の考古学者が認識する差異は古墳時代当時でも意味があった差異であることを主張してきた（佐々木2017, 2018など）。

5　アメリカ総合人類学の枠組みの中で考古学が社会論にも貢献できることを示すため、Binford（1971, p. 10）は、埋葬方法の差異は、被葬者の生前の社会的地位と「同型写像isomorphism」と言い切ったのである。それに対して古墳時代考古学では、甲冑の大量副葬が当時の被葬者の地位をどの程度示すのかについて1960年代以来議論を重ねており、葬制の変異の考古学的解釈については、日本考古学は1960年代、1970年代のアメリカ合衆国プロセス考古学者ほど楽観的ではなかった。

6　余談であるが、筆者が大阪大学文学部で研究生としてお世話になっていた1990年代前半、小林行雄の旧蔵書が大阪大学の考古学研究室に一括して寄贈され、小林文庫の整理を筆者も手伝うという光栄に浴した。驚いたのは、太平洋の島嶼地域が国際連盟による日本の信託統治領であった1930年代の民族誌が数多く含まれていて、小林の仮説のネタはこういうところにあったのかと推測した。ただ、マオリ族の民族誌があったかどうかは確認していないので、同笵鏡論のヒントがマオリ族の民族誌にあったかどうかは不明である。

引用文献

Baitinger, Holger and Fritz-Rudolf Herrmann 出版年不明 *Der Glauberg am Ostrand der Wetterau.* Archäologische Denkmäler in Hessen 51.

Biel, Jörg 2003 Macht und Dynamik: Fürstengräber der frühen Keltenzeit. *Menschen, Zeiten, Räume: Archäologie in Deutschland,* edited by Wilfried Menghin, pp. 190-195. Theiss, Stuttgart.

Binford, Lewis R. 1971 Mortuary Practices: Their Study and their Potential. *Approaches to the Social Dimensions of Mortuary Practices,* edited by James A. Brown, pp. 6-29. Society for American Archaeology Memoir, No. 25.

Brown, James A. 1979 Charnel Houses and Mortuary Crypts: Disposal of the Dead in the Middle Woodland Period. *Hopewell Archaeology,* edited by David S. Brose and N'omi Greber, pp. 211-219. The Kent State University Press, Kent, Ohio.

Cunliffe, Barry 1997 *The Ancient Celts*. Oxford University Press, Oxford.

Emerson, Thomas E., Kristin M. Hedman, Eve A. Hargrave, Dawn E. Cobb, and Andrew R. Thompson 2016 Paradigms Lost: Reconfiguring Cahokia's Mound 72 Beaded Burial. *American Antiquity* 81, pp. 405-425.

Fowler, Melvin L. 1978 Cahokia and the American Bottom: Settlement Archaeology. *Mississippian Settlement Patterns*, edited by Bruce D. Smith, pp. 455-478. Academic Press, New York.

Fowler, Melvin L., Jerome Rose, Barbara Vander Leest, and Steven R. Ahler 1999 *The Mound 72 Area: Dedicated and Sacred Space in Early Cahokia*. Illinois State Museum Reports of Investigations, No. 54.

Frey, Otto Herrmann 1998「中央ヨーロッパ：初期様式」『ケルト美術展―古代ヨーロッパの至宝』pp. 32-33 朝日新聞社

福永伸哉 2015「前方後円墳と世界の墳丘墓築造」福永伸哉・中久保辰夫（編）『21 世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信』, pp. 109-114. 大阪大学大学院文学研究科（科研報告書）

Herrmann, Edward W., G. William Monaghan, William F. Romain, Timothy M. Schilling, Jarrod Burks, Karen L. Leone, Matthew P. Purtill, and Alan C. Tonetti 2014 A New Multistage Construction Chronology for the Great Serpent Mound, USA. *Journal of Archaeological Science*, Vol. 50, pp. 117-125.

Herrmann, Fritz-Rudolf 2003 Die Keltenfürsten vom Glauberg: Frühkeltischer Füustensitz, Füurstengräber und Heiligtum. *Menschen, Zeiten, Räume: Archäologie in Deutschland,* edited by Wilfried Menghin, pp. 190-195. Theiss, Stuttgart.

北條芳隆 1986「墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価」『考古学研究』第 32 巻第 4 号 , pp. 1-26.

Howey, Meghan C. L. 2012 *Mound Builders and Monument Makers of the Northern Great Lakes, 1200-1600.* University of Oklahoma Press, Norman, Oklahoma.

Iseminger, William 2010 *Cahokia Mounds: America's First City.* The History Press, Charleston, South Carolina.

岩崎卓也 1984「古墳出現期の一考察」『中部高地の考古学 III』（『古墳時代史論』pp. 268-291 雄山閣［2000］に再録）

Knight, Vernon James, Jr. 2010 *Mound Excavations at Moundville*. University of Alabama Press, Tuscaloosa.

Knopf, Thomas 2018「ヨーロッパの墳墓」『世界の眼でみる古墳文化』pp. 27-29. 国立歴史民俗博物館

小林行雄 1961『古墳時代の研究』青木書店

近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店

Milner, George R. 1998 *The Cahokia Chiefdom*. Smithsonian Institution Press, Washington, D.C.

〃 2004 *The Moundbuilders.* Thames and Hudson, London.

Moore, Clarence Bloomfield 1905 Certain Aboriginal Remains of the Black Warrior River. Journal *of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia*, Vol. 13, pp. 125-244.

〃 1907 Moundville Revisited. *Journal of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia*, Vol. 13, pp. 337-405.

沼澤豊 2006『前方後円墳と帆立貝古墳』雄山閣

Parker Pearson, Michael 1982 Mortuary Practices, Society, and Ideology: An Ethnoarchaeological Study. *Symbolic and Structural Archaeology,* edited by Ian Hodder, pp. 99-113. Cambridge University Press, Cambridge.

Peebles, Christopher S. 1974 *Moundville: The Organization of a Prehistoric Community and Culture.* Ph.D.

Dissertation, University of California, Santa Barbara.（University Microfilms International, Ann Arbor）
〃 1978 Determinants of Settlement Size and Location in the Moundville Phase. *Mississippian Settlement Patterns*, edited by Bruce D. Smith, pp. 396-416. Academic Press, New York.
Peebles, Christopher S. and Susan M. Kus 1977 Some Archaeological Correlates of Ranked Societies. *American Antiquity,* 42, pp. 42d1-448.
Renfrew, A. Colin 1973 Monuments, Mobilization and Social Organization in Neolithic Wessex. *The Explanation of Culture Change,* edited by A.C. Renfrew, pp. 539-558. Duckworth, London.
佐々木憲一 2011a「古墳時代像と国家概念」『季刊考古学』117 号 , pp. 48-53.
〃 2011b「社会をよむ」『はじめて学ぶ考古学』pp. 101-126. 有斐閣
〃 2014「北アメリカから見た古墳時代考古学」福永伸哉（編）『21 世紀の古墳時代像』（『古墳時代の考古学』9）, pp. 177-191. 同成社
〃 2017 The Kofun Era and Early State Formation. *Routledge Handbook of Premodern Japanese History*, edited by Karl F. Friday, pp. 68-81. Routledge, London and New York.
〃 2018 Social Stratification and the Formation of Mounded Tombs in the Kofun Period of Protohistoric Japan. *Burial Mounds in Europe and Japan: Comparative and Contextual Perspectives,* edited by Thomas Knopf, Werner Steinhaus, and Shin'ya Fukunaga, pp. 87-99. Archeopress, Oxford.
〃 2019「北アメリカのマウンド」福永伸哉・上田直弥（編）『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』（科研報告書）pp. 127-154. 大阪大学大学院文学研究科
Schilling, Timothy 2013 The Chronology of Monks Mound. *Southeastern Archaeology*, Vol. 32, pp. 14-28.
Squier, Ephraim George and Edwin Hamilton Davis 1848 *Ancient Monuments of the Mississippi Valley*. Smithsonian Contribution to Knowledge, No. 1. Washington, D.C.
Steponaitis, Vincas P. 1983 *Ceramics, Chronology, and Community Patterns*. Academic Press, New York.
都出比呂志 1989a「前方後円墳の誕生」白石太一郎（編）『古代を考える―古墳』pp. 1-35. 吉川弘文館
〃 1989b「古墳が造られた時代」都出比呂志（編）『古墳時代の王と民衆』（『古代史復元』6）, pp. 25-52. 講談社
〃 1991「日本古代の国家形成論序説―前方後円墳体制の提唱―」『日本史研究』343 号 pp. 5-39.
〃 1996「国家形成の諸段階―首長制・初期国家・成熟国家」『歴史評論』551 号 pp. 3-16.
〃 2000『王陵の考古学』岩波新書
和田晴吾 1981「向日市五塚原古墳の測量調査より」小野山節（編）『王陵の比較研究』pp. 49-63. 京都大学文学部考古学研究室
若狭徹 2015『東国から読み解く古墳時代』吉川弘文館
Weiner, Annette B. *Inalienable Possessions*. University of California Press, Berkeley.
Whittle, Alasdair 1985 *Neolithic Europe: A Survey*. Cambridge University Press, Cambridge.